

[Why Do Retired Generals become Peace Advocates?](#)

Let us create a curriculum for peace in our military academies



松村氏とドレーパー将軍

.....

何故、退役将軍が平和提唱者になるのでしょうか？

陸軍士官学校に平和のためのカリキュラムを設けようではありませんか

1973年9月、私はジャカルタ郊外に向かって2時間のバス旅行を始めていました。岸信介元首相率いる人口問題及び開発に関する国会議員視察団に同行したのです。一行は既にインドとタイ国への大変実りある訪問を終え、次のインドネシアで移動をしていました。

国会議員全員と3名の外国人特別ゲスト（ドレーパー将軍、元メリーランド州上院議員のジョセフ・タイディングス氏及びジェームス・マクドネル氏）はそれぞれ乗用車に乗り、他のメンバー - 政府官僚、人口問題専門家、報道関係者及びスタッフ - はその後をバスでついていきました。団員で一番若い私はバスの後部座席に座っていました。出発前に日本大使館員がバスの後部にやってきて、ドレーパー将軍が私を呼んでいると言ったのです。彼らの車に行ってみるとドレーパー将軍と副団長の田中龍夫議員は大使館員を連れて一緒に座っていました。ドレーパー将軍は移動中に私と話したかったようで、大使館員に替わって私が乗用車に乗るように言いました。一方、田中議員はドレーパー将軍の隣りに座っていることが居心地悪そうで、格好の口実を思いついたのです - ビデオカメラを撮りたいので、フロント座席の方がいいんだ - 結果として、私はドレーパー将軍と共に後部座席に座ることになり、大使館員は驚いていました。田中議員は、これはドレーパー将軍の要請だとその館員に念を押し、一行は2時間の旅行を始めました。

これに先立ち、ドレーパー将軍は岸氏と話し、岸氏が望んでいる人口問題と開発に関

する日本国会議員グループの創設について協議をしていました – それは世界初の試みでした。岸氏は既に将軍に対して、アメリカ国会議員グループも同様に設立し、数カ国に拡大したネットワーク化が不可欠であることを明らかにしていました。

何故、ドレーパー将軍が私を自分の車に呼んだ理由が分かってきました。私は、1974年に家族を連れてロンドンへ赴き、IPPF(国際家族計画連盟)の仕事に就くことになっていました。ドレーパー将軍は、IPPF事務所でタイディングス上院議員と一緒にアメリカ議員グループを創設するよう私に求めたのです。この時以来今日まで、私はこの職務を忠実に守り続け、アメリカ合衆国国会議員達と一緒に懸命に働いてきました。後日、私はジャカルタでこの一行と別れて、英国でIPPFの21周年記念会議に出席しました。視察団はフィリピンでの最終日程へと旅を続けました。

1974年、私はドレーパー将軍から電話をもらい、フロリダ州ネープルズの自宅に招待され、ジャカルタで車に同乗した時の協議を続けたのです。2人は翌朝の午前中ずっと、そして午後にかけて話し込んでいたために、ドレーパー夫人が割り込んで - 「あなた、いい加減に話を止めて、アキオに泳いでもらったらどうですか？」 私は、美しいプールに目をやりながら、それは素晴らしいお勧めだ、と思いました。ところが、ドレーパー将軍は、「アキオは話をしたい方なのでね」。夫人のお勧めは、お預けとなってしまいました。

その晩は宿泊し、ドレーパー将軍の仲間でダグラス・マッカーサー元帥の主任技士ヒュー・ジョン・ケーシー少将との夕食に招かれました。ケーシー少将は1945年8月末にマッカーサー元帥の先発チームとして日本に到着し、アメリカ占領軍と共に日本に駐留しました。夕食の際、ケーシー少将は彼の素晴らしい性格を表わす話をしてくれましたのでここに披露したいと思います。

1945年クリスマス、ケーシー少将は大勢の日本の子供達を六本木の自宅に招待しました。当日の朝、彼は夫人と相談し博愛の精神から決めたことがあります。それは、「万がいち子供達が何かを盗むことになったとしても彼らを責めないことにしよう」ということでした。

子供達50人が集まりました。半数の子は穴の開いた靴や壊れてしまった下駄を履いていました。残りの半数は裸足でした。そこで夫妻は直ぐメイドに足を洗う準備をさせました。子供達は足を洗ってから大ホールに入り、招待主を待ちました。夫妻はホールに入ると信じられない光景に出くわしたのです。

50人の子供達が正座をし、背の低いものから高い順にきちんと並んでいました。履

物の不足や空腹にもかかわらず、子供達の行儀の良さに、夫妻は本当に驚きました。これは日本人がいかに素晴らしかったか、また、そんな子供のいる日本だからこそ驚異的な復興ができたことを示してくれたのです。

その晩、長時間この二人の将軍と夕食を共にしながら、その様な資質あるリーダーの管轄下に置かれた日本は何と幸運だったんだろう、と思わざるを得ませんでした。ドレーパー将軍は当時アメリカ陸軍省次官で、ケーシー少将はマッカーサー元帥の下で、日本での政策を執行していました。私は、日本が中国、朝鮮、フィリピンやインドネシアを占領していた時、日本の将校達が彼等のような人物であったであろうか、と今でも思いますが、そうではなかったと考えざるを得ません。

将軍達と平和について議論するにつれ、どうして退役将軍達がいつも立派な平和提唱者になるのだろうか、と私は不思議に思うようになりました。アイゼンハワー、マッカーサー、マーシャル、ドレーパー将軍達はすべてこの道を歩んできました。また、それに関しては、世界中の多くの将軍達も同様な行動してきたことも確かです。しかし私の限られた知識ではその人達の名前をここで列挙できませんが、そこには、ひとつの共通した理由が考えられます。

将軍達は常に、勝者、敗者、戦争、平和などその国の命運を背負って綱渡りをしているも同然なのです。この様なとてつもない苦悩を感じ、そして戦争の悲劇を目の当たりにした後では、彼等が強力な平和の提唱者になることは、私が思いつく限りのどんな職業に就くよりも自然な成り行きだと考えたのです。

このことを念頭に置き、ひとつの提案をします。戦争はいつの時代でも人類史の一部でありました。そして近い将来も同様に続いていくでしょう。それならば、士官学校に平和のためのカリキュラムを創設すればどうでしょうか？ 我々の退役将軍達は、そこで大いに貢献できるのです。単純な期待のようですが、それによって平和をより早く達成するという驚異的な成果が実現できるのではないのでしょうか。終戦後の再建と平和の維持は、そもそも戦争に突入するよりはるかに困難であることを歴史は教えてくれています。世界は、その挑戦に取り組むことのできる軍のリーダー達を緊急に必要としているのです。いつから平和のためのカリキュラムを始めましょうか。

.....

上記は次の松村昭雄氏のブログを日本語訳したものです。

**Why Do Retired Generals become Peace Advocates?
Let us create a curriculum for peace in our military academies**

Akio's Blog
April 17, 2009

Plant The Seed of Network
Plant The Seeds of Peace Through Understanding
<http://akiomatsumura.blogspot.com>

日本語訳: 武田忠征 松村氏の中央大学時代の友人